

辞書活用的に進める言葉の探索法
— 日本語「自己実現」を例題とした一試論 —

佐々木 英和

宇都宮大学共同教育学部研究紀要 第73号 別刷

2023年3月

辞書活用的に進める言葉の探索法

— 日本語「自己実現」を例題とした一試論 —

Research Methodology for Exploring Words
Through Comparative Dictionary Use:
An Essay Setting a Japanese Word “Jiko-jitsugen”
Meaning Self-realization on an Example Question

佐々木 英和[†]
SASAKI Hidekazu

【要約】

本稿は、日本語「自己実現」を例題として、複数の一般的な国語辞典を用いて、時間的経過を追ったり比較したりしながら、調査を行ったものである。この単語の源流や用語法を効果的に探っていくための研究の見地が獲得され、実際に進められた。第一に、「自己実現」を考える際に、「自我実現」という言葉も同時に探るべき必要性が明らかになった。「自己」も「自我」も、ともに英語“self”に相当するが、微妙な違いに注意を払う必要がある。第二に、自己実現とは、倫理学説として把握され続けてきており、辞書的には、学説として見出しにされることもしばしばであった。第三に、アメリカの心理学者のアブラハム・マズローの欲求階層論の自己実現概念が普及しているのを意識しつつも、イギリスの思想家のトーマス・ヒル・グリーン的重要性こそが見直されなければならない。

キーワード：自己実現、自我実現、辞書、自我、倫理学説、トーマス・ヒル・グリーン、アブラハム・マズロー

【Summary】

In this paper, the Japanese word *jiko-jitsugen* (self-realization) is investigated by chronologically and comparatively consulting several popular Japanese dictionaries. Research perspectives for effectively exploring the etymology and common usage of this term were acquired and examined. First, special attention must also be paid to *jiga-jitsugen* and the subtle differences between *jiko* and *jiga*, both of which were translated from the English term “self.” Second, it must be emphasized that *jiko-jitsugen* and *jiga-jitsugen* have been persistently understood as academic ethical theories, which were translated into the Japanese word “setsu,” thereby resulting in *jiko-jitsugen-setsu* or *jiga-jitsugen-setsu* often being classified as index words in many dictionaries. Third, it is vital to reconsider the historical importance of Thomas Hill Green, a British thinker, although American

[†] 宇都宮大学 地域創生推進機構 (連絡先: sasakih@cc.utsunomiya-u.ac.jp 佐々木 英和)

psychologist Abraham Maslow's self-actualization concept of the human-needs-hierarchy theory has become prevalent.

Keywords : Self-realization, Self-actualization, Dictionary, Self, Ethical theory,
Thomas Hill Green, Abraham Maslow

はじめに

ターゲットは何でもよいのだが、何か気になった言葉があったとき、どのように調査を始めたらよいのだろうか。たしかに、インターネット全盛の時代には、簡単かつ迅速に検索して、それなりの解答を得ることができる。だが、その答えは、必ずしも満足できるものとは限らず、分かった気になれるだけで、独りよがりにより自己充足する域を出ないことも多そうである。それでは、今となっては一般化している一つの日本語がどのように生まれ、どのように広がっていったかについて探求を深める際に、そもそもの出発点の時点で堅実で、バランスの取れたとっかかりとなる方法は何かないのか。

そうして筆者が思いついたのが、一般的な辞書を何種類か収集し、それぞれについて初版から版を積み重ねているプロセスをフォローしながら、比較の観点を入れて考察を広げることである。本稿では、例題として「自己実現」をつうじて、その作業を実際に行う。とはいえ、筆者は、この言葉の研究については、すでに相当な蓄積を有している¹⁾。そして、それらの予備知識がかえって固定観念になりかねないと懸念するので、全く白紙に返って、主題に虚心坦懐に向き合うようにしたい。言うなれば、本稿は、研究開始の当初からそうしておけばよかったと後悔の念に駆られるような研究方法の開発に努めるものである。

なお、本文では、原則として、漢字の旧字体を新字体に切り換えた。たとえば、「實」を「実」に改めているので、「自己実現」と表記されているものの元が「自己實現」だという場合も含まれる。また、平仮名は基本的にそのまま表記したが、濁点を打ったり漢字を平仮名表記に変えたりなどして読みやすくしたところが一部ある。さらに、漢数字を算用数字にしたところなどもある。

I 『辞苑』及び『広辞苑』の探索

日本人がもっとも親しんでいる辞書として、『広辞苑』の名を思い浮かべる人は相当に多いだろう。この初版は、1955(昭和30)年に発行された。だが、編著者の日本語学者である新村出が、1935(昭和10)年の時点で、『広辞苑』の前身となる『辞苑』という辞書を、博文館という出版社から出していたことを想起しておきたい。『広辞苑』は、第1版から第7版まで出されており、第2版補訂版も含めて、現時点で8種類ある。これに『辞苑』も含めて、9種類の辞書に当たることにする。

例題として選定した「自己実現」という日本語について『広辞苑』関連の調査結果として事前に全体像を示したものが、**図表1**である。ここで注意すべきことは、「自己」を「自我」に置き換えた「自我実現」という言葉の存在である。この言葉の存在に、たまたまでも気づいていたか否かは、研究の分水嶺と化すほど重要である。

図表1 『辞苑』及び『広辞苑』における「自己実現」と「自我実現」の定義

辞書名	版	仕様	第一刷発行日	編者等	出版社	調査項目	
						自己実現	自我実現
辞苑	第1版	全1巻	昭和10 (1935)年 2月1日	新村 出	博文館	じこ・じつげん 【自己実現】(名)〔倫〕(Self-realization) 自己に具有する諸機能を完全に発達せしめること。 876頁	じが - じつげん 【自我実現】(名)〔倫〕(Self-realization) じこじつげん(自己実現) 860頁
						じこ・じつげん - せつ 【自己実現説】(名)〔倫〕 (Theory of self realization) 社会的な生活の下に、各自が天賦の能力を完全に発達させ、理想的自己を実現するを以て、道徳的行為の究極の目的なりとする倫理学説。この学説の大成者はイギリス人グリーン(T.H.Green)。 876頁	じが - じつげんせつ 【自我実現説】(名)〔倫〕 自己所有の人格を完全に発揮させることを目的とする倫理学説。 860頁
広辞苑	第1版	全1巻	昭和30 (1955)年 5月25日	新村 出	岩波書店	見出し語なし 本文912頁 自己実現説。	じがじつげん - せつ 【自我実現説】〔倫〕 最高善たる究極目的は自我の本質の完成・実現にあるとするアリストテレス・グリーンなどの説。自己実現説。 912頁
	第2版	全1巻	昭和44 (1969)年 5月16日	新村 出	岩波書店	見出し語なし 本文946頁 自己実現説。	じがじつげん - せつ 【自我実現説】〔哲〕 最高善たる究極目的は自我の本質の完成・実現にあるとする、グリーンなどの説。自己実現説。 946頁
	第2版補訂版	全1巻	昭和51 (1976)年 12月1日	新村 出	岩波書店	見出し語なし 本文946頁 自己実現説。	じがじつげん - せつ 【自我実現説】〔哲〕 最高善たる究極目的は自我の本質の完成・実現にあるとする、グリーンなどの説。自己実現説。 946頁
	第3版	全1巻	昭和58 (1983)年 12月6日	新村 出	岩波書店	見出し語なし 本文1026頁 自己実現説。	じがじつげん - せつ 【自我実現説】〔哲〕 最高善たる究極目的は自我の本質の完成・実現にあるとする、グリーンなどの説。自己実現説。 1026頁
	第4版	全1巻	平成3 (1991)年 11月15日	新村 出	岩波書店	見出し語なし 本文1101頁 自己実現説。	じがじつげん - せつ 【自我実現説】〔哲〕 最高善たる究極目的は自我の本質の完成・実現にあるとする、グリーン・ユングなどの説。自己実現説。 1101頁
	第5版	全1巻	平成10 (1998)年 11月11日	新村 出	岩波書店	じこ - じつげん 【自己実現】 自分の中にひそむ可能性を自分で見つけ、十分に発揮していくこと。また、それへの欲求。 1159頁	じがじつげん - せつ 【自我実現説】〔哲〕 最高善たる究極目的は自我の本質の完成・実現にあるとする、グリーン・ユングなどの説。自己実現説。 1142頁
	第6版	全1巻	平成20 (2008)年 1月11日	新村 出	岩波書店	じこ - じつげん 【自己実現】 自分の中にひそむ可能性を自分で見つけ、十分に発揮していくこと。また、それへの欲求。マズロー(A. H. Maslow 1908-1970)は、人の欲求階層の最上位に置いて重視した。 1217頁	じがじつげん - せつ 【自我実現説】〔哲〕 最高善を目指す人間の究極目的は自我の本質の完成・実現にあるとする、グリーン・ユングなどの説。自己実現説。 1200頁
第7版	全1冊	平成30 (2018)年 1月12日	新村 出	岩波書店	じこ - じつげん 【自己実現】 自分の中にひそむ可能性を自分で見つけ、十分に発揮していくこと。マズローは、人の欲求階層の最上位に置いて重視した。 1270頁	じがじつげん - せつ 【自我実現説】〔哲〕 最高善を目指す人間の究極目的は自我の本質の完成・実現にあるとする、T.H.グリーン・ブラッドリーなどの説。自己実現説。 1252頁	

A 第二次世界大戦前に発行された『辞苑』の探究

1935(昭和10)年に発行された『辞苑』を検索すれば、第二次世界大戦前にすでに「自己実現」という言葉が、それなりに一般的であったことが確認できる。とはいえ、それは決して日常用語というわけではなかった。

(1) 「自己実現」と「自己実現説」

まずは、『辞苑』を引いてみて、「自己実現」という単語が、どのように扱われているかを確認してみよう。“自己”という見出し語については、“われ”“おのれ”“じぶん”を意味する名詞であることが示されているが、これを用いた熟語は示されていない(874頁)。しかしながら、独立した項目として、「自己実現」という見出し語を発見できた(876頁)。

じこ・じつげん〔自己実現〕(名)〔倫〕(Self-realization)

自己に具有する諸機能を完全に発達せしめること。

ここから少なくとも二つの基本情報が得られる。一つは、「自己実現」が、“Self-realization”という外来語から翻訳された名詞である可能性が高いことである。もう一つは、“〔倫〕”という省略形からわかるように、それが倫理学の文脈で用いられているということである。

さらに、この見出し語には、続きがある。“一せつ”という見出しが続いていて、「自己実現説」という言葉についての定義も示されているのである(876頁)。

じこ・じつげん・せつ〔自己実現説〕(名)〔倫〕(Theory of self realization)

社会的生活の下に、各自が天賦の能力を完全に発達させ、理想的自己を実現するを以て、道徳的行為の究極の目的なりとする倫理学説。この学説の大成者はイギリス人グリーン(T.H.Green)。

ここから、「自己実現」という言葉は、「イギリス人グリーン(T.H.Green)」なる人物の倫理学説の中核的キーワードだと推定できる。“Self-realization”という外来語は、日本語辞書の文脈では、グリーン発祥の英単語だと位置づけてよさそうである。

(2) 「自我実現」と「自我実現説」

ここまでの辞書活用的探究だけでも、かなりの手がかりを得ることができた。だが、ここで満足して、違った角度からの探索を止めてはならない。そこで、「自己」に類似する「自我」という名詞を引いてみると、新たな手がかりを得られそうだと考え、この単語の定義を確認してみる(860頁)。

じが〔自我〕(名)〔哲〕(Ego)

①我を意識する一つの実体。思惟・感受・欲望・意志等の一切の心的状態中、最も主観的に感ぜられるもの。②森羅万象に対して存在する自己一種の人格。

当時において日常用語として位置づけられている「自己」に対して、「自我」とは、“【哲】”という省略語が表示されているように、哲学用語である。そして、この「自我」と接続してできあがる熟語と

して、“従来の服従道德の束縛を脱して、極端な個人本位の自由を主張すること”と定義される“Emancipation of ego”つまり“自我解放”に続けられる形で、「一・じつげん」という表記の元に「自我実現」という単語が明示されているのである(860頁)。

じが-じつげん【自我実現】(名)【倫】(Self-realization)

じこじつげん(自己実現)

この定義によれば、「自我実現」とは、「自己実現」と同義の倫理学用語である。哲学的文脈で用いられる「自我」は、「自我実現」という文脈では倫理学的色彩を強く出している。実際、「一・じつげんせつ」という表記の元に、「自我実現説」という見出し語も示されている(860頁)。

じが-じつげんせつ【自我実現説】(名)【倫】

自己所有の人格を完全に発揮させることを目的とする倫理学説。

哲学用語の「自我」を用いた文脈で学説化した「自我実現」とは、倫理学説に属するとみなせる。この倫理学説において、先に出てきたグリーンが重要人物に位置づくるのは間違いない。

B 岩波書店発行の『広辞苑』における変化

第二次世界大戦前に発行された『辞苑』の調査は、次なる段階のための重要な足がかりとなった。「自己」と「自我」との微妙な違いに着眼すれば、本研究は思いがけない広がりを見せそうである。

(1) 「自我実現説」の変化

1955(昭和30)年の『広辞苑』第1版には、「自我実現説」という見出し語が掲載されている。その部分を引用すると、倫理学用語という位置づけで、この説は以下のように定義されている(912頁)。

じがじつげん-せつ 【自我実現説】

【倫】最高善たる究極目的は自我の本質の完成・実現にあるとするアリストテレス・グリーンなどの説。自己実現説。

つまり、「自我実現説」は、「自己実現説」と言い換えられることが明示されている。その意味では、両者を同義語とみなしてよい。前身の『辞苑』を基準に考えれば、「自己実現」「自己実現説」「自我実現」「自我実現説」の四つの見出し語が整理されて、「自我実現説」一つに集約されたと言える。

時代とともに、「自我実現説」の定義は、微妙に変化している。第1版(1955年)から第5版(1998年)まで、この説の要諦が「最高善たる究極目的は自我の本質の完成・実現にある」という点は一貫して変わっていないが、第6版(2008年)と第7版(2018年)とでは、「最高善たる究極目的」が「最高善を自指す人間の究極目的」という表記に置換されている。さらに、この説を唱えているとされている人物の例示の変遷を見逃すわけにはいかない。

1955(昭和30)年の第1版では、自我実現説とは“アリストテレス・グリーンなどの説”(912頁)だったが、1969(昭和44)年の第2版では、“グリーンなどの説”(946頁)となって、「アリストテレス」

が削られた。さらに、自我実現説は、第1版では倫理学用語としての位置づけで示されていたが、第2版では“〔哲〕”という省略形が示されているように哲学用語としての位置づけに移行し、それ以降は2018(平成30)年の第7版まで、ずっと哲学用語として扱われているのである。

また、自我実現説を唱えたときみなされる人物も頻繁に変更されている。まず、第2版(1969年)・第2版増補版(1974年)・第3版(1983年)までは、“グリーンなどの説”という言い方で、グリーン一人が例示されていた。だが、第4版(1991年)においては、“グリーン・ユングなどの説”(1101頁)と表記され、「ユング」の名前が加えられた。「グリーン」と「ユング」の二人の名前の表示は、第5版(1998年)・第6版(2008年)でも持続した。そして、第7版(2018年)では、さらなる変化が起きた。つまり、“T.H.グリーン・ブラッドリーなどの説”(1252頁)となり、「ユング」の名が削除され、その代わりに「ブラッドリー」の名前が入れ込まれるとともに、「T.H.グリーン」というように、グリーンの氏名にアルファベットが加わった。

以上より、『広辞苑』における「自我実現説」についての説明は、定義それ自体はほとんど変わらないのにもかかわらず、キーパーソンの例示という点では大きく変化してきたと判断できる。「自我実現説=自己実現説」がグリーンの学説である点は一貫しているが、同時にアリストテレス・ユング・ブラッドリーの3人のうちの誰かの説でもあるといった扱いを受けているのである。

(2) 「自己実現説」と「自己実現」

1998(平成10)年の第5版になって、急に見出し語として出現したのが、「自己実現」である。それまでは、「自我実現説」の説明の中で、「自己実現説」という表記が出てくるだけであった。だが、「自己実現説」としてでなく、「自己実現」という見出し語が表舞台に登場したのである。広辞苑第5版には、以下のような定義が示されている(1159頁)。

じこ-じつげん【自己実現】

自分の中にひそむ可能性を自分で見つけ、十分に発揮していくこと。また、それへの欲求。

この「自己実現」という言葉は、第5版・第6版・第7版のいずれにおいても、見出し語として明示されている。その定義には、変わらず一貫している面と、微妙に揺れが見られる面とがある。

一方で、「自分の中にひそむ可能性を自分で見つけ、十分に発揮していくこと」という本質の捉え方については、第5版・第6版・第7版とで不変である。また、「自己実現」を語る際に「欲求」が鍵になることが示されている。“それへの欲求”(第5版では1159頁、第6版では1217頁)という表記が付加され、「自己実現への欲求」が「自己実現」そのものと同一視される可能性を浮かび上がらせている。第7版では「それへの欲求」という表現は削除されているけれども、“欲求階層”という表記が出ている点で、「欲求」が相変わらず重要キーワードであると言って差し支えないのである(1270頁)。

他方で、微妙な変化とは、「マズロー」という人物をめぐる扱いである。第5版では、マズローの名前に触れられていなかった。だが、第6版では、「自己実現への欲求」について、“マズロー(A. H. Maslow 1908-1970)は、人の欲求階層の最上位に置いて重視した”と説明されている(1217頁)。第7版では、「自己実現への欲求」についての言辭が示されていないが、「自己実現」つまり“自分の中にひそむ可能性を自分で見つけ、十分に発揮していくこと”について、“マズローは、人の欲求階層の最上位に置いて重視した”という理解になっている(1270頁)。

以上より、少なくとも以下の3点が推察される。第一に、第4版の出た1991（平成3）年から第5版の出た1998（平成10）年までの間に、「自己実現」という四文字熟語が、広辞苑編集委員会が見出し語扱いすべきだと判断するほど、急速に普及したことである。第二に、「自己実現」は、「欲求」が鍵となった単語として認識されていたことである。第三に、欲求論的文脈で把握される「自己実現」という日本語の普及には、「マズロー」という人物が大きな役割を担っていたことである。

II 各種辞典の探索

一般人が用いると想定されている辞書においては、その分量を主たる基準として、“小型辞書・中型辞書・大型辞書”というような分類が可能である³⁾。先に年代順に見てきた『広辞苑』は、一般には中型辞書に分類される。また、「大辞典」や、それに類する名称がついている辞書の中にも、中型辞書に分類されるものもある。というのは、大型辞書に分類される日本語辞典は、多いものでは分冊されて20冊にもわたる場合もあり、それからみれば、1冊に収まってしまう辞書が、小型辞書とは言わないまでも、中型辞書に分類されるのは当然の成り行きだからである。

A 大型辞書の探索

大型辞書は、いわば言語の宇宙であり、言葉を探る手がかりが豊富に埋もれている。図表2は、『大日本国語辞典』と『日本国語大辞典』とを調査素材として得られた結果を事前に示したものである。

(1) 『大日本国語辞典』の探索

日本初の大型辞書としては、上田万年・松井簡治の共著『大日本国語辞典』（富山房・金港堂）の全5巻が、1915（大正4）年から1919（大正8）年の足かけ5年をかけて発行された。この大事業の成果については、国立国会図書館デジタルコレクションを検索すれば、その中身を見ることができる。

まずは、「自己実現」という日本語が、見出し語として掲載されているかどうかを確認してみよう。すると、名詞の“自己”が“おのれみづから”とか“自分”や“自身”と定義されていることを前提として、“じこ あんじ”や“じこ の けいさん”とに並列されて、倫理学用語という扱いで“じこ じつげん”という見出しが示されていることが確認できる（865頁）。

じこ じつげん 自己実現（英 Self-realization）

【倫】自己の諸性能を完全に発達・実現せしむること。

次に、名詞の“自我”という項目が、心理学では“心的状態中にて、最も主観的に感ぜられるもの”と定義され、哲学的には“天地万物に対して存在する一個の人格”と定義されている中で、その延長上で「自我実現」が説明されていることに注目しよう（841頁）。これもまた倫理学用語である。

じが じつげん 自我実現（英 Self-realization）

【倫】自己の可能性の実現。即ち、自己が本来具有せる完全円満の発揮。人生の究極目的として、自我実現の倫理学上著しく勢力を得来たりしは、英人ぐりーん（Green）の提唱に基く。

ここで、平仮名で「ぐりーん」と書かれている人物がトーマス・ヒル・グリーンを指すことは改めて確認するまでもないだろう。さらに、ここで示されている英単語の“Self-realization”が、グリーン思想の輸入の成果だと考えてよさそうである。

図表2 『大日本国語辞典』及び『日本国語大辞典』における「自己実現」と「自我実現」の定義

辞書名	版	仕様	第一刷発行日	編者等	出版社	調査項目	
						自己実現	自我実現
大日本国語辞典	第1版	全5巻	大正5 (1916)年 10月20日	(著者) 上田 万年 松井 簡治	富山房・金港堂	第2巻865頁	第2巻841頁
						じこ じつげん 自己実現 (英 Self-realization) 【倫】 自己の諸性能を完全に発達・実現せしむること。	じが じつげん 自我実現 (英 Self-realization) 【倫】 自己の可能性の實現。即ち、自己が本来具有せる完全円満の發揮。人生の究極目的として、自我實現の倫理學上著しく勢力を得來たりしは、英人ぐりーん (Green) の提唱に基く。
						第9巻481頁	第9巻398頁
						じこ - じつげん 【自己実現】 〔名〕 「じがじつげん (自我實現)」に同じ。	じが - じつげん 【自我實現】 〔名〕 (英 self-realization の訳語) 自己の可能性を實現すること。自己が本来持っている真の絶対的な自我を完全に實現すること。一九世紀イギリスの哲學者トーマス=ヒル=グリーンは、これが人生の究極目的であると主張した。自己實現。
日本国語大辞典	第1版	全20巻	昭和49 (1974)年 5月1日	日本大辞典刊行会	小学館	第5巻481頁	第5巻398頁
						じこ - じつげん 【自己実現】 〔名〕 「じがじつげん (自我實現)」に同じ。	じが - じつげん 【自我實現】 〔名〕 (英 self-realization の訳語) 自己の可能性を實現すること。自己が本来持っている真の絶対的な自我を完全に實現すること。一九世紀イギリスの哲學者トーマス=ヒル=グリーンは、これが人生の究極目的であると主張した。自己實現。
	第1版縮刷版	全10巻	昭和55 (1980)年 6月30日	日本大辞典刊行会	小学館	第5巻481頁	第5巻398頁
						じこ - じつげん 【自己実現】 〔名〕 「じがじつげん (自我實現)」に同じ。	じが - じつげん 【自我實現】 〔名〕 (英 self-realization の訳語) 自己の可能性を實現すること。自己が本来持っている真の絶対的な自我を完全に實現すること。一九世紀イギリスの哲學者トーマス=ヒル=グリーンは、これが人生の究極目的であると主張した。自己實現。
第2版	全13巻+別巻	平成13 (2001)年 6月20日	日本国語大辞典第二版編集委員会 小学館国語辞典編集部	小学館	第6巻622頁	第6巻511頁	
					じこ - じつげん 【自己実現】 〔名〕 じがじつげん (自我實現) に同じ。 *普通術語辞彙 (1905) <徳谷豊之助・松尾勇四郎> 「自己實現と云ふのは、自己の發達の可能性を成就することである」	じが - じつげん 【自我實現】 〔名〕 (英 self-realization の訳語) 自己の可能性を實現すること。自己が本来持っている真の絶対的な自我を完全に實現すること。一九世紀イギリスの哲學者トーマス=ヒル=グリーンは、これが人生の究極目的であると主張した。自己實現。 *現代大辞典 (1922) <木川・堀田・小堀・阪部> 現代用語「自我實現 (ジガジツゲン)」	
精選版	全3巻	平成18 (2006)年 2月10日	小学館国語辞典編集部	小学館	第2巻275頁	第2巻238頁	
					じこ - じつげん 【自己実現】 〔名〕 =じがじつげん (自我實現) 〔普通術語辞彙 (1905)〕	じが - じつげん 【自我實現】 〔名〕 (英 self-realization の訳語) 自己が本来持っている真の絶対的な自我を完全に實現すること。一九世紀イギリスの哲學者トーマス=ヒル=グリーンは、これが人生の究極目的であると主張した。自己實現。 〔現代大辞典 (1922)〕	

(2) 『日本国語大辞典』の探索

先に見た『大日本国語辞典』の業績を発展的に引き継いでいこうとする企図のもとに、日本大辞典刊行会が編集した『日本国語大辞典』(小学館)の初版は、1972(昭和47)年から1976(昭和51)年の5年間にわたって刊行されたものであり、全20巻にも及ぶ。これらと同内容のものが、1979(昭和54)年から1981(昭和56)年までの3年間をかけて、『日本国語大辞典[縮刷版]』の全10巻として刊行された。次に、日本国語大辞典第二版編集委員会と小学館国語辞典編集部とが編集した『日本国語大辞典 第二版』(小学館)は、2000(平成12)年から2002(平成14)年までの3年間をかけて、別巻1冊も含めて計14冊に分冊されて発行された。さらに、2006(平成18)年には、小学館国語辞典

編集部が編集した『精選版 日本国語大辞典』（小学館）が全3巻セットで発行されている。

この大型辞書は、「自己実現」という日本語をどのように扱っているのか。この言葉は、『日本国語大辞典』の初版の第9巻（1974年発行）では、以下のように表示されている（481頁）。

じこ-じつげん【自己実現】〔名〕

「じがじつげん（自我実現）」に同じ。

この表示の仕方は、半ば当然のことながら、『日本国語大辞典〔縮刷版〕』でも同じであった（第5巻、1980年、481頁）。この点は、『日本国語大辞典 第二版』でも全く変化はない。ただし、第二版では、以下のような用例が引用されていることは注目してよい（第6巻、2001年、622頁）。

* 普通術語辞彙（1905）＜徳谷豊之助・松尾勇四郎＞

「自己実現と云ふのは、自己の発達の可能性を成就することである」

この用例の存在により、「自己実現」という日本語が、どんなに新しくても1905（明治38）年の時点には存在していたことが確認できる。なお、この用例は、『精選版 日本国語大辞典』では具体的には書かれておらず、“普通術語辞彙（1905）”という出典が示されているのみである（第2巻、2006年、275頁）。

いずれにせよ、この大型辞書では、「自己実現」が従で、「自我実現」が主となる日本語として扱われている。そこで、「自我実現」という日本語について、『日本国語大辞典』初版で確認すると、以下のように説明されていた（第9巻、1974年、398頁）。

じが-じつげん【自我実現】〔名〕（英 self-realization の訳語）

自己の可能性を実現すること。自己が本来持っている真の絶対的な自我を完全に実現すること。19世紀イギリスの哲学者トーマス＝ヒル＝グリーンは、これが人生の究極目的であると主張した。自己実現。

この説明によれば、「自我実現＝自己実現」は、「自己の可能性を実現すること」や「自己が本来持っている真の絶対的な自我を完全に実現すること」と定義されるものであり、それらは「人生の究極目的」になりうるといえる話になる。この定義は、『日本国語大辞典〔縮刷版〕』ではもちろん、『日本国語大辞典 第二版』でも、一言一句変更無く踏襲されている。しかし、『精選版 日本国語大辞典』では、「自己の可能性を実現すること」という文言は存在しない。精選版では、精選された結果として、「自己の可能性を実現すること」が、「自己実現」の定義を構成する要素としては削除されたのである。

また、『日本国語大辞典 第二版』では、「自我実現」という言葉の出典として、“現代大辞典（1922）＜木川・堀田・小堀・阪部＞”が新たに示されている（第6巻、2001年、511頁）。これに対して、この追加点については、『精選版 日本国語大辞典』では、“現代大辞典（1922）”と短く示されているのみである（第2巻、2006年、238頁）。

なお、『日本国語大辞典』には、「自己実現説」や「自我実現説」といった表記は、見出し語としては存在していなかった。この点についての精査は、別の機会に譲ることにする。

B 中型辞書の探索

先に、中型辞書としては、『広辞苑』を調査素材として、時系列的な変化を把握した。今度は、複数の中型辞書を調査して、横断的な比較ができるようなアプローチを進めたい。

(1) 三省堂発行の『大辞林』の探索

松村明と三省堂編修所とが編者となって1988(昭和63)年に初版が発行された『大辞林』(三省堂)は、現代語を中心として、幅広い項目を収めることを企図していた(あとがき24頁)。これに関して、調査対象の「自己実現」及び「自我実現」という日本語の定義を、**図表3**で整理している。

図表3 『大辞林』における「自己実現」と「自我実現」の定義

辞書名	版名	巻数	第一刷発行日	編者等	出版社	調査項目			
						自己実現	自我実現		
大辞林	第1版	全1巻	昭和63(1988)年11月3日	松村明 三省堂編修所	三省堂	じこ じつげん 【自己実現】 [self-realization] 自己の素質や能力などを発展させ、より完全な自己を実現してゆくこと。T= H=グリーン・ユングなどの説。 自我実現。→ 個性化	1047頁	じが じつげん 【自我実現】 自己実現 (じこじつげん)に同じ。	1034頁
	第2版	全1巻	平成7(1995)年11月3日	松村明 三省堂編修所	三省堂	じこ じつげん 【自己実現】 [self-realization] 自己の素質や能力などを発展させ、より完全な自己を実現してゆくこと。T= H=グリーン・ユングなどの説。 自我実現。→ 個性化	1098頁	じが じつげん 【自我実現】 自己実現 (じこじつげん)に同じ。	1084頁
	第3版	全1巻	平成18(2006)年10月27日	松村明 三省堂編修所	三省堂	じこ じつげん 【自己実現】 [self-realization; self-actualization] 自己の素質や能力などを発展させ、より完全な自己を実現してゆくこと。T= H=グリーン・ユングなどの説。 自我実現。→ 個性化	1089頁	じが じつげん 【自我実現】 自己実現 (じこじつげん)に同じ。	1074頁
	第4版	全1巻	令和元(2019)年9月20日	松村明 三省堂編修所	三省堂	じこ じつげん 【自己実現】 [self-realization; self-actualization] 自己の素質や能力などを発展させ、より完全な自己を実現してゆくこと。T= H=グリーン・ユングなどの説。 自我実現。→ 個性化	1182頁	じが じつげん 【自我実現】 自己実現 (じこじつげん)に同じ。	1166頁

それでは、1988(昭和63)年に発行された『大辞林』第一版を丁寧に考察していこう。まずは、「自己実現」という項目を探してみると、以下のように書かれていた(1047頁)。

じこ じつげん【自己実現】 [self-realization]

自己の素質や能力などを発展させ、より完全な自己を実現してゆくこと。T=H=グリーン・ユングなどの説。自我実現。→ 個性化

これに従えば、「自己実現」とは、「自己の素質や能力などを発展させ、より完全な自己を実現してゆくこと」であり、「自我実現」と同一だという話になる²⁾。実際、『大辞林』第一版では、“じが じつげん【自我実現】”という見出し語の説明は、“自己実現 (じこじつげん)に同じ”となっている(1034頁)。よって、1980年代末に発行された『大辞林』では、裏表の関係でいえば、「自己実現」が表面で「自我実現」が裏面の扱いになっており、『広辞苑』における扱いとは真逆である。

また、この説明により促される二つのポイントを見落としてはならない。一つは、T・H・グリーンと並列されて「ユング」なる人物の名前が示されている点である。もう一つは、「個性化」という項目を参照するよう指示が出ている点である。『大辞林』第一版では、“個人・個物を他の人・物から区別しようとする固有の特性”とか“パーソナリティ”と定義されている“個性”の項目の延長上で、“一か”という表記に相当する「個性化」について、以下のように書かれている(881頁)。

こせい化【個性化】

精神分析学者ユングの用語。個人に内在する可能性を実現し、人格を完成していくこと。
個体化。→個性

この「個性化」という項目を見ると、『大辞林』で示された学者として、「ユング」の名前が出てくることの意味が明らかである。実際、「個性化」が「個人に内在する可能性を実現し、人格を完成していくこと」と定義されるのであれば、それが「自己実現」と同義とみなされても全く差し支えない。こうした用語を用いるユングが、学説のレベルでピックアップされるのも自然である。

この「個性化」と「ユング」という二つのポイントは、『大辞林』において、第一版(1988年)・第二版(1995年)・第三版(2006年)・第四版(2019年)というように、時代が変わっても一貫している。ただし、「自己実現」の訳語として、第三版では、“self-realization”だけが示された状態に“self-actualization”が加わった(1089頁)、その状態は、第四版でも継続している(1182頁)。

(2) 三省堂発行の『辞林』の探索

1993(平成5)年に発行された三省堂編修所編『辞林21<机上版>』(以下、『辞林21』と略す)は、新しいタイプの機能的辞典をめざしており、先に見た『大辞林』のデータベースをもとに作成されているものである(i~ii頁)。それゆえに、この辞書は、言葉の選定法や定義が『大辞林』と基本的に同じであるとはいえ、この辞書ならではの省略もしくは変更がなされている点に注目すべきである。

まず、『辞林21』における「自己実現」は、誰の学説かというような付帯情報を割愛している。その点で、簡潔な定義が示されている(890頁)。

じこじつげん【自己実現】[self-realization]

自己の素質や能力などを発展させ、より完全な自己を実現してゆくこと。自我実現。

他方で、「自我実現」を調べてみると、“じがじつげん【自我実現】→自己実現”と示され、「自己実現」を参照するよう指示が出ている(879頁)。両者は同義語扱いされている。

1999(平成11)年には、『辞林21』の後継的な意味を持つ三省堂編修所編『新辞林』(三省堂)が出された。この辞書では、「自我実現」についての説明が全く変わっていない(797頁)。しかしながら、“じこじつげん【自己実現】”の大本となる英語としては、“self-realization”に加えて“self-actualization”も提示されているし、定義が大幅に変更されて、“自己の潜在的な資質や能力を最大限に開発し、発揮すること”と示され、「完全な自己を実現してゆく」という表現が削除されている点は特筆に値する(807頁)。

なお、図表4は、『辞林21』と『新辞林』の調査状況を一覧表で示したものである。ここでは、整理の便宜上、両者を『辞林』という名称で一括している。

図表4 『辞林』における「自己実現」と「自我実現」の定義

辞書名	版	仕様	第一刷発行日	編者等	出版社	調査項目	
						自己実現	自我実現
辞林	21	全1巻	平成5 (1993)年 11月1日	三省堂 編修所	三省堂	じこじつげん 【自己実現】 [self-realization] 自己の素質や能力などを発展させ、より完全な自己を実現してゆくこと。自我実現。 890頁	じがじつげん 【自我実現】 →自己実現 879頁
	新辞林	全1巻	平成11 (1999)年 7月10日	三省堂 編修所	三省堂	じこじつげん 【自己実現】 [self-realization self-actualization] 自己の潜在的な資質や能力を最大限に開発し、発揮すること。自我実現。 807頁	じがじつげん 【自我実現】 →自己実現 797頁

(3) 講談社発行の『カラー版 日本語大辞典』の探索

梅棹忠夫・金田一春彦・阪倉篤義・日野原重明が監修者となった『講談社 カラー版 日本語大辞典』(以下『日本語大辞典』と表記する)は、1989(平成元)年に初版が、1995(平成7)年に第二版が発行された。この辞書の「自己実現」と「自我実現」の定義について表にして整理したものが、図表5である。あらかじめ言えば、両者について簡潔な定義が示され、初版と第二版とで変化は全くない。

図表5 『カラー版 日本語大辞典』における「自己実現」と「自我実現」の定義

辞書名	版	仕様	第一刷発行日	編者等	出版社	調査項目	
						自己実現	自我実現
カラー版 日本語大辞典	第1版	全1巻	平成元 (1989)年 11月6日	(監修) 梅棹 忠夫 金田一 春彦 阪倉 篤義 日野原 重明	講談社	じこ-じつげん 【自己実現】 心理学で、自分もつ多くの可能性の実現をめざすこと。 839頁	じが-じつげん 【自我実現】 自分の持っている性質・才能を完全に発達させること。self-realization 829頁
	第2版	全1巻	平成7 (1995)年 7月3日	(監修) 梅棹 忠夫 金田一 春彦 阪倉 篤義 日野原 重明	講談社	じこ-じつげん 【自己実現】 心理学で、自分もつ多くの可能性の実現をめざすこと。 927頁	じが-じつげん 【自我実現】 自分の持っている性質・才能を完全に発達させること。self-realization 915頁

まず、“じこ-じつげん【自己実現】”については、“心理学で、自分もつ多くの可能性の実現をめざすこと”(傍点は引用者強調)と書かれている(初版では839頁、第二版では927頁)。ここで注目すべきは、簡潔な定義の中にも、大きな変化の兆しが見取れることである。広辞苑では、「自己実現」が学説として扱われる場合は、倫理的な意味合いで用いられていたのと比較すれば、心理学用語として「自己実現」が用いられている実態が念押しされている点が注目に値する。

次に、“じが-じつげん【自我実現】”については、“自分の持っている性質・才能を完全に発達させること”と定義されており、“self-realization”という英単語も示されている(初版では829頁、第二版では915頁)。「自己実現」と「自我実現」とは似ている言葉として扱われているけれども、微妙なニュアンスの違いを読み取るよう指示した定義のされ方が浮かび上がっている。

(4) 小学館発行の『大辞泉』の探索

今や「デジタル大辞泉」として時代とともに更新され続ける辞書となった『大辞泉』であるが、固定された紙の情報をもとに、探索を進めていきたい。そこで、本稿では、1995(平成7)年に出された小学館『大辞泉』編集部編『大辞泉』(小学館)と、上下二巻に分かれた状態で2012(平成24)年に発

行された小学館大辞泉編集部編『大辞泉〔第二版〕』（小学館）との2種類を調査対象とする。この調査結果の全体像を表にして示したものが、図表6である。

図表6 『大辞泉』における「自己実現」と「自我実現」の定義

辞書名	版	仕様	第一刷発行日	編者等	出版社	調査項目	
						自己実現	自我実現
大辞泉	第1版	全1巻	平成7 (1995)年 12月1日	(監修) 松村明 (編修) 小学館 『大辞泉』 編集部	小学館	見出し語なし	1142頁 じが - じつげん 【自我実現】 《self-realization》 普遍的、絶対的自我的実現が 究極の目的であり、それに導 く行為が正しい行為だとする、 T=H=グリーンやブラッドリー などの倫理説。
	第2版	全2巻 (上・下)	平成24 (2012)年 11月7日	(監修) 松村明 (編修) 小学館 大辞泉 編集部	小学館	上巻1585頁 じこ - じつげん 【自己実現】 1 《self-realization》 自己本来もっている真の絶対的 な自我を完全に実現すること。 普遍的、絶対的自我的実現が 究極の目的であり、それに導 く行為が正しい行為だとする、 T=H=グリーンやブラッドリー などの倫理説。グリーンは、こ れが人生の究極目的であるとし た。自我実現。 2 転じて、自分の目的、理想の 実現に向けて努力し、成し遂げ ること。「一を夢見る」「第二 の人生では地域への貢献を通じ て一を目指す」	上巻1564頁 じが - じつげん 【自我実現】 《self-realization》 普遍的、絶対的自我的実現が 究極の目的であり、それに導 く行為が正しい行為だとする、 T=H=グリーンやブラッドリー などの倫理説。 →自己実現

まず、1995(平成7)年に出された『大辞泉』初版を確認してみる。そこでは、「自己実現」の項目が出ていなかった反面、「自我実現」については、具体的な定義が示されている(1142頁)。

じが - じつげん【自我実現】《self-realization》

普遍的、絶対的自我的実現が究極の目的であり、それに導く行為が正しい行為だとする、T=H=グリーンやブラッドリーなどの倫理説。

この定義によれば、「自我実現」という日本語は、「普遍的、絶対的自我的実現が究極の目的であり、それに導く行為が正しい行為だとする倫理説」のことであり、わざわざ「自我実現説」という言い方をしなくても、学説の一種として扱えるものになる。この辞書の大きな特徴は、倫理学説を唱えた人として、「T=H=グリーン」と並べて、「ブラッドリー」なる人物を指摘しているところにある。そして、この定義は、『大辞泉〔第二版〕』でも、全く同一のものとして継承されている(上巻1564頁)。

じが - じつげん【自我実現】《self-realization》

普遍的、絶対的自我的実現が究極の目的であり、それに導く行為が正しい行為だとする、T=H=グリーンやブラッドリーなどの倫理説。→自己実現

ここで、2012(平成24)年の時点では、「自我実現」の定義に全く変更はないけれども、“自己実現”という項目を参照するように指示が出ていることが新しく、特記に値する(上巻1564頁)。実際、その指示に従って、該当部分に相当する見出し語を参照してみよう(上巻1585頁)。

じこ-じつげん【自己実現】

- 1 《self-realization》自己が本来もっている真の絶対的な自我を完全に実現すること。普遍的、絶対的自我の実現が究極の目的であり、それに導く行為が正しい行為だとする、T=H=グリーンやブラッドリーなどの倫理説。グリーンは、これが人生の究極目的であるとした。自己実現。
- 2 転じて、自分の目的、理想の実現に向けて努力し、成し遂げること。「一を夢見る」「第二の人生では地域への貢献を通じて一を目指す」

この用語説明は、これまで見てきた辞書のものと比較して極めて特徴的であり、「自己実現」という日本語には、基本的なものだけでなく、発展的な意味があることが示されている。それによれば、「自己実現」とは、「自分の目的、理想の実現に向けて努力し、成し遂げること」を意味し、具体的な用例として、「自己実現を夢見る」や「第二の人生では地域への貢献を通じて自己実現を目指す」の二つが示されている(上巻1585頁)。なお、『大辞泉』第二版の段階では、「自己実現」と「自我実現」の関係は、レコード盤の喩えでは、いわば両A面の関係にあるとみなせよう。

C 小型辞書の探索

あらかじめ結論すれば、小型辞書では、「自己実現」や「自我実現」について、掲載されていたり掲載されていなかったりといった状況がまばらである。今回は、紙幅の都合上、考察の詳細を割愛せざるをえないが、小型辞書における単語の掲載状況それ自体を主題としてよいであろう。

(1) 「自己実現」や「自我実現」が見出し語として掲載されていない小型辞書の例

多くの人が用いている辞書でも、「自己実現」という日本語が載っていないことが案外と多い。たとえば、山田忠雄他編『新明解 国語辞典[第八版]』(三省堂、2020年、初版は1972年)では、“自己”の見出しの項目の流れの中で、「自己暗示」「自己完結」「自己欺瞞」「自己嫌悪」「自己顕示」「自己資本」「自己顕示」「自己資本」「自己紹介」「自己疎外」「自己破産」「自己批判」「自己流」といった言葉の説明が書かれているのにもかかわらず、「自己実現」という見出し語は掲載されていないし(643頁)、「自我実現」という日本語表記も見当たらない。また、本稿が頻用している『広辞苑』は、岩波書店が出版しているものだが、同出版社の発行している西尾実他編『岩波 国語辞典[第8版]』(岩波書店、2019年、第1版は1963年)でも、“自己”の見出しの項目の流れの中で「自己矛盾」などの四字熟語が示されているが「自己実現」は存在せず(634頁)、「自我実現」も見当たらない。

いわゆる小型辞書は、その分量的制約の関係上、日本語として存在するものを網羅的に掲載しようと企図したものではない。そのため、「自己実現」や「自我実現」がそもそも見出し語として扱われない場合も多い。「自己実現」とは、たびたび耳にするようになったとはいえ、日常語として絶対に必須の一般的な言葉へと仲間入りしているわけではないと評価されている可能性がある。

(2) 「自己実現」が掲載されている辞書の例

他方で、「自己実現」を見出し語として採用している辞書も見かけられる。たとえば、金田一春彦・金田一秀穂編『学研 現代新国語辞典 改訂第六版』(学研プラス、2019年、初版は1994年)では、“自己”という見出しの流れの中で、「自己実現」について“自分が本来持っている可能性を実現すること”

と定義し、“自我実現”が明示されている(613頁)。

また、時間経過とともに、新たに「自己実現」を見出し語として採用するプロセスに立ち会える場合もある。図表7は、見出し語として「自己実現」と「自我実現」がどのように扱われているかについて、2002(平成14)年に初版が発行された北原保雄編『明鏡 国語辞典』(大修館書店)を素材として、第二版の2010(平成22)年、第三版の2021(令和3)年へと至る変化を捉えたものである。そこでは、「自我実現」が一向に見出し語になっていない反面、「自己実現」については、初版(2002年)の時点では存在しなかった見出し語が、第二版(2010年)に初めて採択され、第三版(2021年)でも継続して採用されていることが確認できる。“じこ-じつげん 【自己実現】”という見出し語が明示され、“自分のもつ能力を最大限に開発し、より成長した自己を実現すること”と定義されるのに加えて、「自己実現を目指す」という用例が示されている(第二版では726頁、第三版では685頁)。

図表7 『明鏡 国語辞典』における「自己実現」と「自我実現」の定義

辞書名	版	仕様	第一刷発行日	編者等	出版社	調査項目	
						自己実現	自我実現
明鏡 国語辞典	第1版	全1巻	平成14 (2002)年 12月1日	北原 保雄	大修館 書店	見出し語なし	見出し語なし
	第2版	全1巻	平成22 (2010)年 12月1日	北原 保雄	大修館 書店	じこ-じつげん 【自己実現】《名》 自分のもつ能力を最大限に開発し、より成長した自己を実現すること。「-を目指す」 726頁	見出し語なし
	第3版	全1巻	令和3 (2021)年 1月1日	北原 保雄	大修館 書店	じこ-じつげん 【自己実現】[名] 自分のもつ能力を最大限に開発し、より成長した自己を実現すること。「-を目指す」 685頁	見出し語なし

Ⅲ 辞書的探索から浮かび上がる重要人物

本稿は、複数の日本語辞書を活用して「自己実現」という日本語を調査してきた結果、その言葉が掲載されているか否かの具体的状況を詳細に明確化した。その際、「自己実現」だけでなく「自我実現」という日本語の状況についても明らかにすべきだと判明したので、それに関する調査も行った。さらに、こうした作業は、自己実現概念をめぐるキーパーソンがどのように登場するかの状況を明瞭にすることを要求するものでもあった。

日本語辞書の扱いとしては、たいていは「自己実現」と「自我実現」とは同義語である。だが、キーパーソンを絡めて考察し直せば、発生論的には、両者を必ずしも同一視してよいわけではなく、両者が完全一致するというよりも交差する関係にあると見たほうがよさそうである。そこで、両者の繊細な関係を把握するための準備的な見取り図を描きたい。図表8は、調査項目として用語と人物を設定した軸に対して、調査素材たる日本語辞書の状況が具体的にどうなっているかという軸を掛け合わせて、一覧表で示したものである。この表は、対象とした各々の調査素材の「自己実現(説)」や「自我実現(説)」中に、キーワードや人名といった調査項目が存在しているか否かを、凡例として「◎・×・△・□・ー」といった記号に意味を持たせる中で一目でわかるようにしている。

図表8 日本語「自己実現」に関して辞書活用的調査により浮かび上がってきた重要人物の状況

調査項目 調査素材				調査対象用語				調査対象人物										
				自己実現		自我実現		グリーン		アリストテレス		ユング		ブラッドリー		マズロー		
				自己実現	自己実現説	自我実現	自我実現説	自己実現(説)	自我実現(説)	自己実現(説)	自我実現(説)	自己実現(説)	自我実現(説)	自己実現(説)	自我実現(説)	自己実現(説)	自我実現(説)	
中型辞書	広辞苑	第1版	1935年	◎	◎	◎	◎	◎	×	×	×	×	×	×	×	×	×	
		第1版	1955年	×	○	□	◎	-	◎	-	◎	-	×	-	×	-	-	×
		第2版	1969年	×	○	□	◎	-	◎	-	×	-	×	-	×	-	-	×
		第2版補訂版	1976年	×	○	□	◎	-	◎	-	×	-	×	-	×	-	-	×
		第3版	1983年	×	○	□	◎	-	◎	-	×	-	×	-	×	-	-	×
		第4版	1991年	×	○	□	◎	-	◎	-	×	-	◎	-	×	-	-	×
		第5版	1998年	◎	○	□	◎	×	◎	×	×	×	◎	×	×	×	×	×
		第6版	2008年	◎	○	□	◎	×	◎	×	×	×	◎	×	×	◎	◎	×
	第7版	2018年	◎	○	□	◎	×	◎	×	×	×	×	×	◎	◎	◎	×	
	大辞林	第1版	1988年	◎	×	◎	×	◎	△	×	×	◎	△	×	×	×	×	×
		第2版	1995年	◎	×	◎	×	◎	△	×	×	◎	△	×	×	×	×	×
		第3版	2006年	◎	×	◎	×	◎	△	×	×	◎	△	×	×	×	×	×
		第4版	2019年	◎	×	◎	×	◎	△	×	×	◎	△	×	×	×	×	×
	辞林	辞林21	1993年	◎	×	◎	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
		新辞林	1999年	◎	×	◎	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
	日本語大辞典	第1版	1989年	◎	×	◎	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
		第2版	1995年	◎	×	◎	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
	大辞泉	第1版	1995年	×	×	◎	×	-	◎	×	×	×	×	-	◎	×	×	×
		第2版	2012年	◎	×	◎	×	◎	◎	×	×	×	×	◎	◎	×	×	×
	大型辞書	大日本国語辞典	第1版	1915～1919年	◎	×	◎	×	×	◎	×	×	×	×	×	×	×	×
第1版			1972～1976年	◎	×	◎	×	△	◎	×	×	×	×	×	×	×	×	
日本語大辞典		第1版縮小版	1979～1981年	◎	×	◎	×	△	◎	×	×	×	×	×	×	×	×	
		第2版	2000～2003年	◎	×	◎	×	△	◎	×	×	×	×	×	×	×	×	
		精選版	2006年	◎	×	◎	×	△	◎	×	×	×	×	×	×	×	×	

- 凡例： ◎ 該当部分に、その項目や人名が明示されている部分
 □ その項目が含まれている部分（「自己実現説」の中の「自己実現」、「自我実現説」の中の「自我実現」など）
 △ その人名が明示されていないが、明らかに関連していると判断できる部分
 × 該当部分に、その人名が掲載されていない部分
 - 前提として「自己実現」や「自我実現」に関連する項目が存在していない部分

A 調査対象項目の分節化

ことは日本語「自己実現」に限らないが、具体的に調査を進めていくと、当初は想定していない事態に直面し、調査素材そのものを分節化しなければならないことがある。本研究で言えば、「自己」と「自我」との表記の異なりが、一見して大差がなさそうなようで、実は大きな違いを含むということがそれに相当する。四文字熟語レベルでは「自己実現」と「自我実現」、学説レベルでは「自己実現説」と「自我実現説」とについて、その位置づけや意味づけについて、その異同を意識しなければならない。

そして、その際に誰がキーパーソンになっているかが、重要な着眼点となる。

B 調査対象人物のクローズアップ

これまでの辞書活用的考察より、以下の人物の名前が浮かび上がった。それは、グリーン、アリストテレス、ユング、ブラッドリー、マズローの5人である。各々について、復習しておくことにする。

(1) 最重要人物としてのグリーン

本調査では、わざわざ一つ一つを振り返るほどがないほど、固有名詞としての「グリーン」にぶち当たった。それは、「グリーン」や「ぐりーん」というように、名字だけが示されることもあれば、「T・H・グリーン」とか「トマス・ヒル・グリーン」というように、ファーストネームやミドルネームも同時に示されることもある。

辞書の調査の文脈では、「自己実現や自我実現あるところに、トマス・ヒル・グリーンあり」と言っても、決して過言ではない。自己実現概念について原点回帰的もしくは歴史的経緯を追求する研究を行うとすれば、このグリーンなる人物を避けて通ることができないことが明らかになった。

(2) 『広辞苑』におけるアリストテレス

本稿の調査において、一瞬だけ登場し、それ以降は言及されなくなった人物がいる。それが、1955(昭和30)年の『広辞苑』第一版に「アリストテレス・グリーンなどの説」(912頁)と示されたアリストテレスである。逆に言えば、1969(昭和44)年に『広辞苑』第二版が発行されるまでの約15年間ほどは、「自我実現説」を調べた人は、アリストテレスも関係してくると考えたはずである。

いずれにせよ、自己実現・自我実現という文脈において、なぜアリストテレスが言及された時期が存在したのかの理由を問うという課題が残っている。裏を返せば、『広辞苑』において、なぜアリストテレスが削除されてしまったかの理由も追及しなければならないだろう。

(3) 『大辞林』におけるユングの辞書的影響

先にも見たように、自己実現論的文脈において、ユングの存在は、『大辞林』に限ってのことだが、グリーンと同等と言ってよいほど重要である。さらに、その影響は、どうやら『広辞苑』にも及んでいそうであり、その第4版(1991年)で初めて“グリーン・ユングなどの説”(1101頁)と表記されて「ユング」の名前が示される事態は、第5版(1998年)・第6版(2008年)でも持続したのである。

だが他方で、『広辞苑』第7版(2018年)では、“T.H.グリーン・ブラッドリーなどの説”となり、「ユング」の名が削除されたことの意味を考えなければならない(1252頁)。この変質を、辞書編纂上の単なる紙幅的都合として、あたかも軽いことのように考えて終わるわけにはいかないのである。こうしたいきさつが生じた理由は、改めて考察されなければならないだろう。

(4) 『大辞泉』におけるブラッドリー

先に見たように、1995(平成7)年に発行された『大辞泉』第一版では、自我実現説について、「T=H=グリーンやブラッドリーなどの倫理説」と位置づけている(1142頁)。そして、この状況は、2012(平成24)年に発行された『大辞泉』第二版においても、持ち越されている(上巻1564頁及び上巻1585頁)。この『大辞泉』の一貫性は、他の辞書にも影響を与えているように思われる。

実際、2018(平成30)年に発行された『広辞苑[第七版]』で、“自我実現説”についての説明として、それまでの「ユング」に代わり、「ブラッドリー」が登場した。『大辞泉』にいう「自我実現説=自己実現説」の代表的な提唱者がトマス・ヒル・グリーンとブラッドリーの二人であるという説明を、『広辞苑』が採用したことになる。そうなった理由も明らかにしたいところである。

(5) 辞書的文脈における新顔としてのマズロー

先に見たように、『広辞苑』が、2008(平成20)年の第6版で「自己実現」を定義する際に強調したのは、“マズロー(A. H. Maslow 1908-1970)”である(1217頁)。この人物は、2018(平成30)年の第7版では“マズロー”と単純に表記されるようになったが(1270頁)、その時点では、“人間の欲求を生理的欲求、安全欲求、所属・愛情欲求、自尊欲求、自己実現欲求の階層として捉える理論を提唱”した“アメリカの心理学者”として、見出し語に昇格したので、まさに特記に値する(2758頁)。

マズローは、辞書的文脈では新顔に相当するけれども、21世紀になって以降は、日本語「自己実現」の普及において極めて重要な人物であると、『広辞苑』関係者から評価されたとみなせよう。グリーンとは異なる文脈で、非常に注目していかなければならなくなっている人物である。

まとめにかえて

本研究は、時代的変遷という意味でも、また種類の意味でも、複数の辞書を用いて、日本語「自己実現」について調査したものである。まず、この言葉は、そもそもは欧米由来の外来語らしいことがはっきりした。また、その成立と展開には、トマス・ヒル・グリーンをはじめとした思想家が大いに関係していたこともはっきりしてきた。さらに、この言葉は倫理学や哲学、もしくは心理学における専門用語として扱われ続け、一般用語としての辞書的地位を得るまでには相当な時間がかかったとみなせる。このように、一般的な国語辞書をフル活用することから、相当程度まで「自己実現」の位置づけと意味づけを明らかにできることが判明した。

一註・引用文献一

- 1) この詳細については、以下を参照のこと。佐々木英和「日本語『自己実現』の内実の歴史の変容についての覚え書き」、宇都宮大学共同教育学部編『宇都宮大学共同教育学部研究紀要』第72号第1部、2022年所収、510～512頁。
- 2) 筆者は、自己実現概念について、「自己実現そのもの」と「自己実現による効果」とを混同しないように提案しており、「人間の可能性の発揮」については、後者として扱うべきだと主張している(佐々木英和「自己実現の人間教育論的意義(第3章)」、杉浦健・八木成和編著『人間教育の基本原則—「ひと」を教え育てることを問う』、ミネルヴァ書房、2020年所収、49～67頁)。
- 3) 今野真二『『日本国語大辞典』をよむ』、三省堂、2018年、10～23頁。

令和4年10月3日受理

Research Methodology for Exploring Words
Through Comparative Dictionary Use:
An Essay Setting a Japanese Word
“Jiko-jitsugen” Meaning Self-realization
on an Example Question

SASAKI Hidekazu